

# 「函館花いっぱい道づくりの会」

函館市



代表  
折谷 久美子さん

## イメージ広がった函館新道の風景

「7年前、函館の入り口である函館新道をおもてなしの気持ちを込めて、たくさんの花でお迎えしたらどんなにか喜ばれるだろう。そんなイメージが頭の中に広がり、何も分からないまま無我夢中でやってきました。多くの素敵な仲間<sup>に</sup>に恵まれ、未熟なわたしを育ててくださり、5月23日に第21回全国『みどりの愛護』功労者国土交通大臣表彰を受賞させていただいたのも、構成する27団体、参加するおよそ900人の花を愛しむ気持ちが認められたからだと思います」と、にこやかに話す「函館花いっぱい道づくりの会」代表の折谷久美子さん。道央方面から車を走らせて来ると函館山が見えてきて「いよいよ函館に着いた」と、わくわくした気持ちになる国道5号函館新道。その600メートルの区間の植樹帯を、同会では、春から秋にかけて1万株の鮮やかな花々で彩っています。



スポーツ少年団の子どもたちも植栽に参加

「函館花いっぱい道づくりの会」は、折谷さんが花でまちづくり、道づくりをしている人たちと出会い、ボランティアサポートプログラム (V.S.P.) のことを知り、函館道路事務所、函館市、財団法人函館市住宅都市施設公社の4者と協定を締結し、2004年(平成16年)4月に7団体でスタートしました。同年6月には函館インターチェンジ付近の函館新道沿線で最初の植栽を開始。その時の規模は植栽区間150メートル、花株5500株、15の参加団体、参加人数は350人でしたが、その後、徐々に人も花苗の数も拡大していきました。

## 思ったら、まず行動

折谷さんは、花に対する純粋な気持ちで、汗を流し、手を泥だらけにしながら取り組み続けています。戸惑ったこと、落ち込んだこと、ぼろぼろと涙を流したこともあったそうです。しかし、必ず誰か、ずっと手を差し伸べてくれる人がいたとのこと。きっと折谷さんの真面目で、一生懸命な姿に「この人をサポートしてあげなければ」という気持ちにさせる不思議な魅力があるからなのでしょう。

会には近隣の小中学生やスポーツ少年団の子どもたちも数多く参加しており、頻りに車の通る場所での作業では、参加者の安全確保に最も注意をされているそうです。初めての活動の直前に事故防止について尋ねられた時には、はじめ「対処方法の見当がつかず頭が真っ白になりました」ということですが、ここから折谷さんならではの行動力。警察に一人で出向き「(2004年)6月13日に子供も含め400人ほどで、函館新

道で植栽を行いますので、パトロールよろしくお願ひします」と、図面を持って伝えてきたそうです。当日は警察OBの交通安全指導員の協力を得ることもでき、今年で7回目になりますが、毎年、ボランティアで参加していただいているようです。このように安全には十分に気をつけて活動していることで、これまでは事故とは無縁です。

また、大人がこうした活動をする姿を子どもたちに見せることも、有意義なことだと強く感じているそうです。

「時代が時代だけに、公的機関からの花苗の提供も厳しい状況にあります。かといって花の少ない寂しい風景は作りたくありません。そこで新道沿いの大型量販店へも一人で行き、『お花の苗いただけませんか』と単刀直入にお願いしました。また、本社との相談が必要と言われたときには、一人で札幌の本社へ協力をお願いに行ったこともあります。」

折谷さんは「わたしって人の顔を見れば、寄付お願いします、何かくださいって言うてみたいで、ちょっと図々しいかしら」と笑います。しかし、提供する方たちも自分たちが暮らす地域の道を花できれいにして、利用する人たちと共に喜びを共有しようという折谷さんの情熱に心を動かされるからこそ、毎年快く花苗だったり、会の皆で食べる豚汁の野菜などを提供してくださるのでしょう。

## マルチシートで雑草を増やさない

年間のスケジュールは、GW明けから活動を開始し、6月の第2土曜日に植栽が行われ、10月までの第2土曜日が全体活動日となっています。以前は、1週間ぐらい雑草取りをしないしていると、天候によってはあつという間に花が雑草に隠れてしまい「もう、活動は止めてしまったんですか」と聞かれたこともあったのですが、対策として黒いマルチシートを使うようにしたら、ずいぶんと作業が楽になったということです。折谷さん曰く「やらなければならないという責任感に縛られた活動は少しも楽しくはありませんし、楽しくなければ長くは続きません。活動する日に参加できる人が、参加するというスタンスを打ち出してきたこともこれまで継続してきたポイントです。」

こうして、マルチシートのおかげで花にかかりつきりになることもなく、シーズンを終える10月下旬にかけては花の撤収が行われます。函館開発建設部の除雪ステーションの広い敷地の一部に大きな穴を掘り、撤



マルチシートを用いた植栽

収した花とEM菌を入れブルーシートをかけたら、しばしお休み。翌年の春にはミミズがいっぱいの、いい黒土ができるため、植栽に再利用し、新たに土や肥料を購入する経費を抑える工夫もしています。軍手やゴム手袋の持参を呼びかけることも、参加人数が多いだけに大事ということでした。

「花のない冬には、多くの人の目を楽しませた花々を押し花にして保存をし、フラワーアイスクャンドルにしてもう一度活躍してもらいます。函館新道の両側にやさしい光が灯り、その光に照らされる氷の中の花で一面幻想的な雰囲気になります。」

折谷さんは「もしかすると苦勞をしてきたのかもしれませんが、苦勞を苦勞と思わずここまでやってきました。活動のあと、しっかりお化粧をして出かけ、ふと自分の指を見ると爪の間に土が入っていて、少々気恥ずかしい思いをしたなんていう笑い話も一つや二つではありません。準備やらなんやらで会の活動が忙しく、家のことは二の次になることもずいぶんありましたが、家族がよく理解してくれました」と、ご主人や娘さんに対し感謝の気持ちでいっぱいようです。



植栽後の国道5号（7月の様子）